

第二十三回

白鳥省吾賞

受賞作品集

「自然」の詩

「人間愛」の詩

宮城県栗原市  
栗原市教育委員会  
白鳥省吾記念館

一般（高校生以上）の部

**最優秀賞  
「残照」**

為平 澄

優秀賞  
「十月の桜」「あかい実の成ること」  
雪柳あうこ

優秀賞  
「あかい実の成ること」  
久保田智子

優秀賞  
「ふるさと賞」「私と私」  
高橋 結衣

審査員奨励賞  
「今を生きる」  
まがたま

小・中学生の部

**最優秀賞  
「はじめての海」**

蜂谷 杏琉

優秀賞  
「全てはつながっている」菅原直樹詩  
「か」

特別賞  
「殻」「15分間の楽しみ」「錯覚の景色」  
A K A M A M U S I

内山 芽泉  
菅原 綾菜

審査員奨励賞  
「過ぎ行く歌」「晴れ時々曇り所により大笑い」

佐藤 奈夏  
千葉 瑞奈

佐藤 玖咲

審査員選評

小・中学生の部

6

一般の部

2

受賞作品

あいさつ

栗原市長 佐藤 智 1

# △ 目次 △

都道府県別応募状況

白鳥省吾氏御令息あいさつ  
寄稿「第22回白鳥省吾賞を受賞して」井上 尚美  
白鳥 東五

17

17

三浦 明博  
渡辺 通子

16

佐々木 洋一  
原田 勇男

15

川中子 義勝

14

原田 勇男  
川中子 義勝

13

原田 勇男  
川中子 義勝

12

原田 勇男  
川中子 義勝

11

6

2

# あいさつ

栗原市長 佐 藤 智



生れ故郷の栗駒山は  
ふじの耶まより  
なつかしや

これは、白鳥省吾先生が詠まれた詩であり、栗原市築館の薬師公園に鎮座する石碑に刻まれております。

栗原市は、国定公園「栗駒山」に抱かれ、清流「迫川」が貫流して大地を潤し、ラムサール条約指定登録湿地の「伊豆沼」「内沼」が四季折々の表情を魅せるなど、多くの自然とそこに暮らす市民の人間愛に満ちた田園都市です。さて、郷土出身の白鳥省吾先生は、故郷の山河と民衆をこよなく愛し、農民の姿や純朴な人々の生活から、深い愛郷心と農民魂をもつて民衆詩を詠いあげ、口語自由詩の発展に多くの偉業を残した民衆詩派の代表的詩人であります。

この白鳥省吾先生の功績や足跡を後世に伝えることを目的として、平成十年七月一日に

「白鳥省吾記念館」を開館し、今まで全国各地から多くの皆さんにご来館いただいております。

今回で二十三回目を数える「白鳥省吾賞」は、自然“または”人間愛”をテーマとした自由詩を募集し、優秀な作品を審査・表彰することとして、市民の文化水準の向上に資することはもとより、白鳥省吾先生が生涯取り組んでおられた自由詩を広く知つていただく機会とするために長きにわたり実施している事業であります。

長引く新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中、人々の日常生活への影響が続いているますが、この度の白鳥省吾賞への応募作品として、一般の部に千六十七編、小・中学生の部に六百二十八編、合計で千六百九十五編の自由詩が全国各地から届けられましたことに喜びを感じております。

その数ある作品の中から、晴れて受賞の栄に浴された皆様には、謹んでお祝いを申し上げますとともに、今後ますますのご活躍をご期待申し上げます。

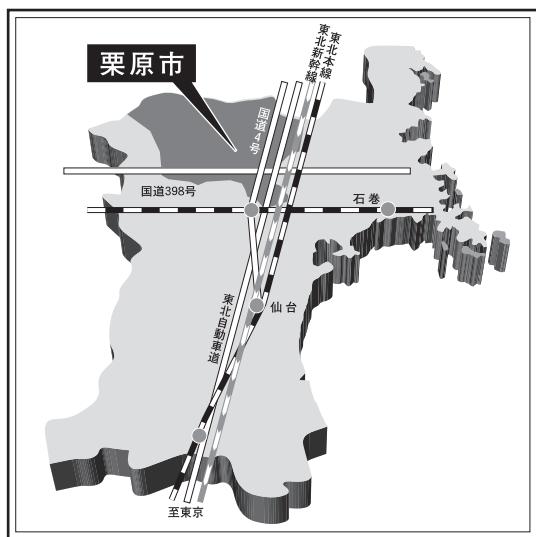
また、審査員の皆様には、厳正な審査をしていただきましたことに感謝の意を表するとともに、白鳥省吾賞の事業実施にあたり、ご支援、ご協力をいただきました関係各位に対し心から御礼を申し上げ、挨拶といたします。



市 章

デザインは、栗原市の頭文字、ひらがなの「くり」をモチーフにしたもので、シンプルにバランスよく、活力のある親しみやすい形で表現しています。  
緑色は、自然たっぷりの田園都市をイメージし、中央の形は、栗原の象徴「栗駒山」と、米どころの作物「お米」を合わせて表現しています。

平成十七年九月十五日制定



宮城県栗原市

# 一般（高校生以上）の部 受賞作品

**最優秀賞**

## 「残 照」

為平ためひら  
澪みお

京都府八幡市

西日に焦げて変色した畳の上で

丸く固まつて洗濯物をたたんでいる母の、

曲がつてしまつたままの太い指だけが

小さく浮かんで 脳裏に灯る

心配事が詰め込まれていつたポケットの中に  
鼻紙や鏽びた鉗や湿つたマツチ箱があつて  
卵焼きの匂いのするようなエプロンは母の、  
どこにしまわれていたのか

——一人暮らしをしてみたい。

実家の両親を見送つて、嫁いだ先の父母と  
夫を看取つた頃には体中を鱗だらけにして、  
曲がらない所が曲がり、曲がる所は伸びつ  
ぱなしになつた老女が最後に訴えた願い。

時刻表の数字も読めない目で

横断歩道を青の間に渡り通せない足で

鞄も持てない手で

母はひとり、どこへ行こうとするのか

（子守唄が聞こえてくるのは、

（いつも進行方向ではない背後

私の手を握つて病院を探し回つた柔かい手を  
振り払つて私が母を置いて出ていつた

振り返れば西の丘陵に大きな夕陽が傾くが  
母娘が並んで映るのは光が沈んだ後なのか

ライトがポツポツ点る街で私は一人になり、  
灯の冷め切つた山の町で母は独り老いていく

底冷えするそれぞれの位置で

互いの姿が見えてくるのは

いつも光を失つてからだ、と

おわりとはじまりの境界線が

残照に照らされ、やがて沈んで消えていく



優秀賞



## 「十月の桜」

雪柳 あうこ

東京都板橋区

どんな夢も抵抗も、静かに枯れてしまう  
尊厳を奪われ、ただすり減る日々  
だから、桜は春だけではなく  
年中咲いてほしいと願われたのだろう

十月だというのに  
桜が、咲いていた

遠い秋、わたしがかつて訪ねた

体が自由に動かない人たちのための  
コロニーという名の巨大な牢獄には

光に満ちた中庭に、桜の樹があつた

四人部屋、四つのベッドを分ける

糞尿の臭いが染みついたカーテンを  
少しでも白く美しく見せるためか

それとも、一人ではどこへも行けない体が  
たた生きることを必死に寿ぐためにか

十月だというのに、桜は

忙しく咲いて、はらはらと散つていた

すべての日常が完結されるコロニーでは

優秀賞

## 「あかい実の成ること」

久保田 智子

兵庫県尼崎市

街中でふと、狂い咲きの桜に出会う時  
コロニーの方角から来た、花攫う風の  
うつすらとした生きることの臭さは  
時折わたしの秋を照らし、かき乱す

体が不自由なのではない  
忙しない社会が、その体を無力にして  
四つ切の病室へと押し込めたのだと  
カーテンは翻り、桜は病室を舞う

今日もまた、コロニーで生涯を閉じた命を  
なかつたものにしないために  
十月だというのに

桜が、咲いている

わたしに、問いを突き付けるように

三十年ほども前のこと  
森で出会った 足の達者な老女に

楊梅の木を その実の食べ方を教わった  
掌に あかい実をのせ「むかし」と言つた

バス停の横

大きな 楊梅の木

毎年 怠りなく鈴成りの実をつけ  
わずかな期間 落ちた実で  
あかく ぐろく 輔道を染める

ある年の 晴れた日

雨傘を手にした青年が

楊梅の木の下で 傘を開いた

ひよいと傘を 逆さまに持ち替えて

傘の柄で 楊梅の枝を突つき

落ちてくる実を そのまま傘で受けていた  
そうか この手があつたかと感心したのに  
まだ一度も 真似てはいない

むかし どの村も 楊梅の木が全部が全部  
恐ろしいほど 実が成った

あかい あかぐろい実が 恐ろしいほどに

昭和二十年のこと

終戦の年は そんな年でもあつたと

小さな実を 掌に転がして

この実が怖いなんて おかしいでしよう?

ひそりと笑つた あの老女と

老女との ひとときを

楊梅の実のころ 決まって思い出す

バス停の横の 楊梅の木は

三年前に 枝を大きく伐られ

翌年は 実を成さなかつた

今年 根元から伐られた 楊梅の木

瑞々しく 痛々しい 切り株に

白いベビーシューズの片方が

ちよこんと のつていたことを

楊梅の実が成るころ 思い出すのだろうか

## ふるさと賞

### 「私と私」

高橋 たかはし  
結衣 ゆい

宮城県栗原市

誰か知らないおじいさんも  
私も

隣の赤いバラも

テレビに出ていた桜も

皆にキレイと言われるカーネーションも

地球上に生えている草も

私も

キレイな花と呼ばれた

不思議な名前のキレイな花を買った

若いスースを着た女性に買われた

毎日水をやり可愛がつたら大きくなつた

毎日水をもらい褒められたから育つた

水をやり いつてきます

水をもらい ありがとうございます 頑張れ

良いことがあると悪いことが

悪いことがあると良いことが

皆それぞれ何かある

それでも毎日を過ごしている

私と私

若い女性と花

隣の席のあの子も

テレビの前の皆のあこがれも

会社のマドンナも

## 今を生きる

### まがたま

止まない雨はないと そんな偽りの言葉はもう 誰の心にも響くことはなくなつただろう

未知のウイルスが世界を侵して一年半

連日耳にする言葉は「過去最多」

心を打ちつけるごしやぶりの雨は 弱まるばかりか

日に日に激しさを増している

「これから先、世界は、日本は、私は、どうなる？」

いつの時代も人々は 先の見えない未来に怯え震えている 未来とは 今を生きる者を呪う悪霊かいや違うと空は言う

気が遠くなる程の永遠を 空は変わらず其処に在り続ける 五十億年前に宇宙の何処かで

星が大爆発を起こした時、地球は漆黒の巨大な空間の中にその姿を現した そして地球の

天面には空という水色の広大な面積が生まれ

それは何十億もの年月を同じ位置で過ぎてきました

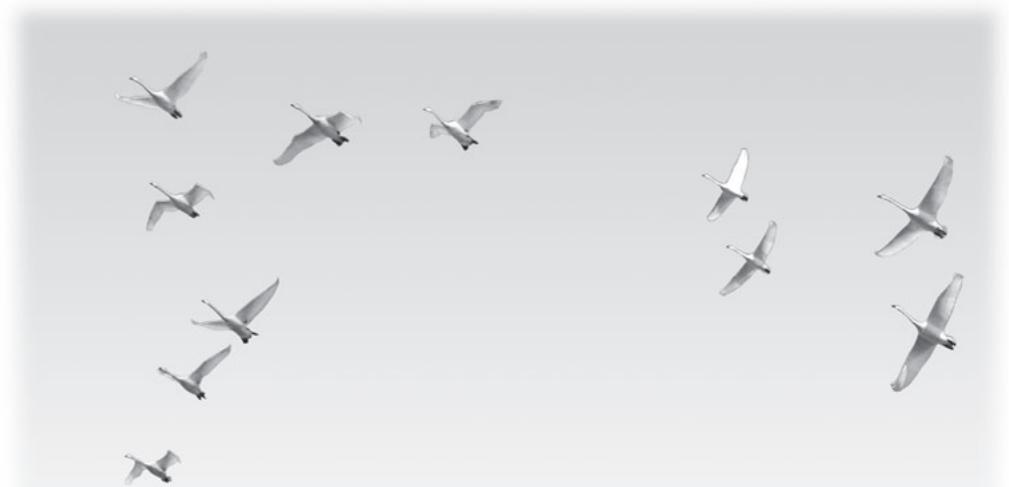
私は空へ問う 君はいつまでも其処に居て辛くないのかと 君はあとどのくらいの未来を生きるつもりなのかと  
空は答える 私に未来という概念などない  
あるのは今この瞬間を空としてどう生きるかだと

今 晴れて光を地表へ送り届けるべきか  
今 雨を降らせて土壤を潤わせるべきか  
今 雪を降らせて空気中の塵を絡め取るべきか  
今 雷を落として稲の豊作を促すべきか  
空曰く 今この瞬間に 全てのエネルギーを使っているらしい

同様に 本来人間にも未来という概念はないと空は言う 狩猟が生きる唯一の手段であつた原始の人間は 今日の食料を得るために巨大な猛獸と戦つてきた 彼らは一瞬一瞬を生きることのみに心血を注いできた

「今この瞬間が全てなのだ」

そう空は私に力強い眼で言い放つた



# 小・中学生の部 受賞作品

## 最優秀賞



### 「はじめての海」

蜂谷 はちや  
杏琉 あんりゅう

宮城県栗原市立  
鷺沢小学校二年

なみうちぎわに立つてみると  
前からおそつてきた つめたい海の水  
なみが引く時とけていく かかとのすな  
「おまえをのみこんでやるぞお」  
つて、言つてゐるみたい

そこにあらわれた大きな口のなみ  
ひつくりかえつてのみこまれたあ  
しんじやうつて思つたとき見えた 海の中  
すながただよつていて海草がながれてる  
うきわのおかげでおぼれなかつたわたし  
いのちのおんじん

海のしおでしょっぱい口の中  
キンキンするはな  
スースーする目

おかあさん

かおをふいて、ちいんとはなをかんだタオル  
なんてあつたかくて氣もちがいいんだろう

お今まで行けばなみは来ないつて言つたつて  
こわくて行けないよお  
入りたいな、でもこわいな、  
やめようかな、でも入りたいな、  
もうパニックになりました

おとうさんがひっぱつてくれたうきわ  
うん、だいじょうぶ、こわくない

いつもはんこうきのお兄ちゃんが  
ひさしぶりにえがおになつた  
わたしもみんなも えがおになる

今日はみんなのえがおいっぱいの一日  
とってもすてきな はじめての海



## 優秀賞

「全てはつながっている」

菅原  
すがわら  
詩  
うた

宮城県栗原市立  
栗原西中学校一年

人は死んだらどうなるの  
「土に帰るのさ」  
人は死んだらどうなるの  
「星になるのさ」

姿を変えながら自然の法則に従う私たちは、

永遠に消えることのない物質の塊

様々な形で地球のあらゆるものや宇宙とつな

がっている

そう思つたとたん、通学路の落葉や小石まで

もが愛おしく見えてくる

「あなたは誰の一部だつたんだい」

庭には一生を終えたアブラゼミ 彼もまた星

になる準備ができたようだ

「星になるのさ」

人は死んだらどうなるの  
「土に帰るのさ」

人は死んだらどうなるの  
「星になるのさ」

一千度の熱は、あらゆる部位で様々な化学反

応を起こす

一部は灰となり、一部は水となつて空へ舞い

上がる

さつきまで確かにそこにあつた体は、姿を変

え、新たな生き場所を探す旅へ出る

あるものは土に帰り、草木の中に取り込まれ、

またあるものは遠く宇宙空間まで飛び出し、

星の一部を形成する

これを新たな命の誕生と言うならば、死は生

の始まりなのか

## 優秀賞

「か」



宮城県栗原市立  
築館小学校一年  
大場  
おおば  
直樹  
なおき

## 優秀賞

## 特別賞



## 「殻」

愛知県岡崎市立  
竜海中学校二年  
内山 芽泉

君達は我慢強い  
何年もの間ひとり土の中にいたのだから  
尊敬してしまうよ  
きっと君から見たら  
休校も自肃もほんの短かな時だろう  
でも私にとつての今は殻の中にあるみたい  
庭の所々にある蟬の抜け殻を見て  
羨ましいと思う私は  
君達に嫉妬しているのかもしれない

けれど頭では分かつていても  
気持ちは追いつかない  
まだまだ子供の私は  
殻の中から見る世界は窮屈で  
今までの何気ない日常生活がずっと遠くに感じる

君達が騒ぐ気持ち  
痛いほど今の私は分かるから  
もし私が殻から出たら  
きっと同じ

君達が満喫しているよう  
いつもの夏とは違つて聞こえる君達の声  
降り注ぐ声で

私のモヤモヤをかき消してくれ  
さあ私！取りあえず宿題をやつつけようか  
私は深く息を吸う  
何だかすがすがしかった

君達は横断歩道を渡り  
青空の下で気持ちよさそうに揺れている  
バツクには栗駒山  
思わずこぐ速度を遅める

私は深く息を吸う  
何だかすがすがしかった

正面に見えてきた光り輝く稻たち  
花だんを過ぎて神社に一礼  
朝日に背中を押され  
ぐんぐん進む

## 特別賞



## 「15分間の楽しみ」

宮城県栗原市立  
金成小中学校九年  
菅原 綾菜

「いつてきます。」  
「いつてらっしゃい。」

勢いよく自転車をこぎ始める  
花だんを過ぎて神社に一礼  
朝日に背中を押され  
ぐんぐん進む

「おはよう、いつてらっしゃい。」  
「おはようございます。」  
お母さんたちが談らんしている  
と言うと  
「おはよう、いつてらっしゃい。」  
と笑顔で返してくれる  
何だか嬉しかった

ほのかに香るしよう油のにおい  
この家の朝食は何だろう  
煮物かな  
それともしょよう油汁かな  
微妙な距離で邪魔されたくない  
でも分かつてゐるんだ  
今はその想いは殻の中にしまつておくのが  
大切なものを守ることになる

学校が見えてきた  
あつ

## 特別賞



## 「錯覚の景色」

AKAMAMUSI

宮城県栗原市立  
築館中学校二年

自転車をこぐ足が今日はなんだか軽い

目的地は決めていない

友達とどこまでも行く

友達はトレーニングだと言つてどんどんこ

いで行く

学校や教室で話さない事を話しながらペダ

ルをこいだ

一人では味わえない解放感を僕は楽しんで

いた

通つた事がない道を進む

新鮮な感覺にワクワクした

いつもそこにある景色なのに、まるで知ら

ない町へ来たような錯覚を感じる

なぜなのが不思議だつた

きっと見えていなかつた景色がよく見えた

からかもしれない

僕達が通つた道は稻が色付き始め、コスモ

スが色鮮やかに揺れていた

どこにでもある景色なのに友達と通つたこ

の道や風景を僕は忘れないと思った

夕暮れまで僕達はペダルをこぎ続けた

疲れているのに気分が良い

「また行こう」と約束を交わし帰路へついた  
うす暗くなる景色に僕はなんだか不安になつて、こぐ足に力が入つた

審査員奨励賞  
過ぎ行く歌まつお  
奈夏

金沢大学附属中学校二年

地獄である 地獄である

癒しの風が駆け抜けることはない

空気が揺らめく ふわふわとした夢遊感

ただ 地面の生々しさを除いて

業火に燃えた岩肌は 消えぬ瘡蓋で

黒く、ただひたすらに黒く爛れている

ガラス細工にするように そつと触れてみる

カサリ、指先の熱に 深淵の怒りを思わず

雲仙岳とは名ばかりの 地球の激しい怒号

君は何に怒っているの?

答えは 砂糖菓子を溶かすほど簡単

灰色の森に降り立つて 木々の緑を思い知る

黒スプレーを噴き上げて 空の青を思い知る

重箱が光をまき散らして 星の白を思い知る

嗚呼、なんとも惨めな後手後手だ

朝六時半起床

私の頭の中はボンヤリ

固まつた全身をほどくように 上に向く  
燃える怒りに 悲しみの雲は似合わない

太陽は嘲笑うようで 届きやしない

拙い、遙か一色の空 ああ、青信号だ

私たちとはどうに迷子で 行く当てもない  
だからこそ 自分の信じる前に進んでいく

蟻なら蟻なりの一歩を より多く踏み出す  
転んで土の味を知つても また立てばいい

嘆くな ながくそびえ立つこの山のもとで  
無駄にするな 後手後手で悲惨な私たちを

## 審査員奨励賞

まつお  
奈夏

金沢大学附属中学校二年

土の中で朝日を待つ種子たちに

迷える時間はあるのだろうか

あおい涙の惑星を コンクリートで覆うとき

私たちは何を知るのだろうか

私たちは何を変えていくのだろうか

分からぬ 何も 分からぬ

ただ この壮大で強大で寛大な自然と

対等に笑いあいたいと思う

そのために歩み続ける 私でありたいと思う

晴れ時々曇り所により大笑い

さとう  
佐藤 玖咲宮城県栗原市立  
築館中学校一年

くもり空のようで  
まだよく考えられない

今の私の天気は曇り  
夢の中は雪原のような別世界

午前八時学校到着

教室に入り

友達と一緒におしゃべり  
友達と話すのたのしいな

今の私の天気は快晴  
今の心配はいりません

八時五十分授業スタート

授業の準備を忘れたことに気付き  
私の心に風がふいた

すっと背筋が凍つた  
私の天気は真冬並の冷めたい風

十時二十分授業中

クラスの男子の一言で  
クラス中が笑つた

みんなで笑うのたのしいな  
今の私の天気は笑いのち大笑い

十二時五十分まちにまつた給食

今日の給食は

ごはん・牛乳・フルーツポンチ・  
なめこ汁・さんまの梅煮・ゼリー

私の大好物ばかり

今の私の天気は晴れ

午後十時就寝目を閉じた

チラチラと雪がふり目の前は銀世界  
夢の中は雪原のような別世界

明日の天気は時々曇り所により大笑い

でしそう

傘の心配はいりません  
明日の天気は時々曇り所により大笑い

## ガラス越しのメッセージ

千葉 瑞奈

宮城県栗原市立  
築館中学校二年

その日はなんとなく

カーテンを開けたまま寝ることにした

次の日、朝になつて起きると

昨夜のかえるはもういなかつた

あのかえるは必死に生きているんだ

なのに私は甘えていた

私よりかえるのほうがずっとすごい

今ごろあのかえるはきっと

他の誰かの家の窓を探しているんだ

私は布団から抜け出し

ペンをとつて宿題に取りかかつた

あのかえるが伝えてくれた

ガラス越しの頑張れってメッセー

ジを胸に



# 第二十三回白鳥省吾賞審査員選評

## 詩の映し出す内省の時間



川中子 義 勝

仕方は巧みで、読者にも自己を顧みさせる訴えを潜めています。

もう一人の優秀賞、久保田智子さんの「あかい実の成ること」は、日常的な言葉で、一本の

コロナ禍のため外出を控える日々が続く一方、自分と向きあう時間は増えました。心募作品にも内省から生まれたものが多くあります。最優秀賞に選ばれた為平澤さんの「残照」も「内なる時間」を主題とする作品。人生の劳苦としがらみに疲れ、むしろ独りを欲する母の姿に、「ふるさと賞」、高橋結衣さんの「私と私」は、娘は、育まれた記憶を振り払つて絆を断つた過去の自分を思いかえしています。近づいた終焉の時が母の一生を刻印しつつ、全てを消し去つていく。一日を限る落日に、母と同じように、娘もまた孤独な姿で照らされている。家族愛の屈折した発露を描きつつ、ついに結びえぬ人間同士の孤絶にまで迫つてゆく表現は巧みです。

優秀賞に選ばれた雪柳あうこさんの「十月の桜」は、不自由な体のため収容されている人々を尋ねた記憶を綴つた作品。尊厳を奪われて施設に生きる人々の夢や願いの象徴として、狂い咲きの桜は、五体満足の能力と美しさのみを評価する社会(や自分)へ問いを突きつける。自然と社会の齟齬を、明るい桜で逆説的に表現する

楊梅にまつわる印象的な思い出を三つ、挿話のように重ねてゆきます。挿話はどれも色彩豊かですが、終連の、切り株と小さな白い靴の対比が鮮やかで、爽やかな希望を感じさせます。内向きの作品が多い中で、自然と結んだ広やかな世界へのひらけを感じました。

「ふるさと賞」、高橋結衣さんの「私と私」は、「謎かけ詩」です。全ての詩がこの様式で書けるとは限りませんが、作品を構成しようという清新な意欲にまずは惹かれます。審査員奨励賞、「まがたま」さんの「今を生きる」は、空との対話から受けとめるという趣向で大切なことを確認しています。コロナ禍の日常に負けない意志を込めた、若々しさが訴える作品です。高橋さんも含め、若い二人の今後の作品に期待しています。

### 著書

詩集「眩しい光」「ものみな声を」「ときの薰りに」「遙かな掌の記憶」「廻るときを」「魚の影鳥の影」「ふたつの世界」など。詩絵本・エッセイ「ふゆごもり」「ミンナと人形遣い」「散策の小径」、評論「詩人イエスードイツ文学から見た聖書詩学・序説」、「詩学講義」、共著「詩学入門」、翻訳「北方の博士・ハーマン著作選」「神への問い合わせ—ドイツ詩における神義論的問いの由来と行方」など。

川中子 義 勝

### プロフィール

元日本詩人クラブ会長、日本現代詩人会会員、日本文藝家協会会員、東京大学名誉教授  
住所 埼玉県さいたま市

### 略歴

東京大学修士課程修了。「詩は人類の母語」と唱え、ゲーテやロマン主義に多大な影響を与えたJ・G・ハーマンの研究で、1998年(平成10年)アマーリエ・フォン・ガリツィン賞受賞(ドイツ)。2010年(平成22年)日本詩人クラブ詩界賞、2016年(平成28年)秋谷豊・詩鳩賞、2017年(平成29年)第23回埼玉詩人賞受賞。日本詩人クラブ新人賞、同詩界賞選考委員などを重ね、第34回現代詩人賞選考委員長。日本現代詩歌文学館振興会評議員。詩誌「ERA」「彼方へ」を編集・発行。月刊誌「詩と思想」編集長。

## それぞれの現実と 真摯に向き合う



原田勇男

最優秀賞は為平澪さんの「残照」。実家の両親を見送り嫁いだ先の父母と夫を看取つて年老いた母が「一人暮らしをしたい」という願いを最後に訴えた。そんな母を振り払つて家を出た私。母と娘のすれ違いの日々を見つめる。触れたくないような現実を直視している点が出色だと思う。

優秀賞は雪柳あうこさんの「十月の桜」。十月なのに桜が咲いた。体が不自由な人たちのためのコロニーでは光に満ちた庭に桜の樹があつた。施設で暮らす人たちの苛酷な日々。現代社会が心身の自由を奪い、尊厳も抵抗も失つて枯れていくだけの悲劇。人間の終末はこれでいいのかという問いと向き合つた真摯な作品である。

同じく優秀賞は久保田智子さんの「あかい実の成るころ」。老婆の話によると終戦のころは食糧難で国民は欠食状態に苦しんだが、どの村も楊梅の木には恐ろしいほど実が成つたという。食べられるものは何でも口に入れた時代、だつた。今は楊梅の木の切り株に白いベビーシューズが乗つていたというユーモラスな思い出もある。

る。

今年度から新しく設けられたふるさと賞（栗

原市在住者）は、宮城県迫桜高校2年・高橋結衣さんの「私と私」が選ばれた。良いことがあ

ると悪いことが、その逆もある。皆それぞれい

ろんな何かがあるが、それでも毎日を過ごして

いる。自分を世の中のさまざまな人や出来事と

比較しながら、青春をみずみずしく生きている。

審査員奨励賞は、まがたさんの「今を生きる」。未知のコロナウイルスが世界中を席巻する現在、「これから先、世界は、日本は、私はどうなる？」と苦しむ女子学生。彼女が空にあとどのくらい未来を生きるつもりかと問う。空は未来という概念などはない。あるいはこの瞬間を空としてどう生きるかだ。「今この瞬間が全てなのだ」。今の現実を精一杯生きることを彼女は学んだ。

東京生まれ。岩手県松尾村（現八幡平市松尾）で育つ。盛岡工業高卒。早稲田大学在学中の二十歳から詩を書き始め、初期の「現代詩手帖」に投稿。詩誌「翼音」「コルサル」「エスプリ」「現代詩手帖」などに詩を発表。1968年（昭和43年）、東京から仙台へ移住。1970年（昭和45年）、宮城県芸術協会会員になる。1987年（昭和62年）度宮城県芸術選奨、2008年（平成20年）度宮城県教育文化功労者表彰。第50回H氏賞選考委員、第30回現代詩人賞選考委員長、2006年（平成18年）より宮城県高等学校文芸コンクール詩部門審査委員長。

### 著書

詩集「北の旅」「炎の樹」「火の奥」「サード」、詩画集「夢の漂流物」（画・上野憲男）、詩集「エリック・サティの午後」「水惑星の北半球のまちで」「何億光年の彼方から」「炎の樹連禱」「かけがえのない魂の声を」、評論集「東日本大震災以後の海辺を歩く—みちのくからの声」、現代詩文庫234「原田勇男詩集」（思潮社）など。

## 原田勇男

日本現代詩人会会員、日本詩歌文学館振興会評議員、宮城県詩人会顧問

住所 宮城県仙台市

### 略歴

東京生まれ。岩手県松尾村（現八幡平市松尾）で育つ。盛岡工業高卒。早稲田大学在学中の二十歳から詩を書き始め、初期の「現代詩手帖」に投稿。詩誌「翼音」「コルサル」「エスプリ」「現代詩手帖」などに詩を発表。1968年（昭和43年）、東京から仙台へ移住。1970年（昭和45年）、宮城県芸術協会会員になる。1987年（昭和62年）度宮城県芸術選奨、2008年（平成20年）度宮城県教育文化功労者表彰。第50回H氏賞選考委員、第30回現代詩人賞選考委員長、2006年（平成18年）より宮城県高等学校文芸コンクール詩部門審査委員長。

### 著書

詩集「北の旅」「炎の樹」「火の奥」「サード」、詩画集「夢の漂流物」（画・上野憲男）、詩集「エリック・サティの午後」「水惑星の北半球のまちで」「何億光年の彼方から」「炎の樹連禱」「かけがえのない魂の声を」、評論集「東日本大震災以後の海辺を歩く—みちのくからの声」、現代詩文庫234「原田勇男詩集」（思潮社）など。

# ふるさと賞が 設けられたこと



佐々木 洋 一  
ささき よういち

一次審査を通過した四十七編の作品に点数を付け、点数の高い順から作品を絞つて最終審査に臨みました。全体としてコロナ禍の影響もあり、内に閉じ籠った作品や肉親の死、病からの克服など個人的な拘りが強い作品が多くなったように思います。各々が持つ重いテーマに読み手の一人として強く惹きつけられました。最終的には、母親への思いが作者の揺れる心情の中で鮮やかに蘇り、はつきりとイメージ化された為平瀬「残照」を最優秀賞に選びました。優秀賞の雪柳あうこ「十月の桜」は、障碍者コロニーで生を終える人間の存在への問いをしつかりと見据えていました。同じく優秀賞の久保田智子

「あかい実の成ること」は、楊梅の木から思い出される懐かしい出来事と白いベビーシューズの新しさとの対比が印象的でした。

今回から地元在住者の作品を対象にふるさと賞が設けられました。足元をしつかりと見つめ育てていくことも大切です。ただ、残念なことに今回の作品からは衝撃を感じることが少なかった。これまで地元から応募された作品には優れたものが散見されたので、今回はたまたまそ

ういつた結果だったのかもしれません。そんな中にあって、地元高校生の二作品を候補に選び、

高橋結衣「私と私」をふるさと賞と決定しました。作者の中で、私と別な私が葛藤する気持ちを率直に書いていて好感が持てました。後藤菜那「期間限定」は、すべての出来事は期間限定の中で移り変わっていくに過ぎないという虚無

的な感覚が面白かったです。二人にはこれからも是非書き続けて欲しい。また、齋藤茂登子「つながりつなぐ」は、故郷とのつながりを軽快なタッチで描きふるさと賞にふさわしかったのですが、市外在住のため選外となりました。審査員奨励賞のまがたま「今を生きる」は、若い力強い意思で人間のありようを切り取つていて力量を感じました。

今回も四十七編の素晴らしい作品に出合えたことに感謝したい。

宮城県栗原郡栗駒町（現在の栗原市栗駒）生まれ。1981年（昭和56年）、詩集「星々」により第20回晚翠賞を受賞。1998年（平成10年）度宮城県芸術選奨を受賞。1999年（平成11年）、詩集「キムラ」により第27回壱井繁治賞受賞。第1回モデラート賞受賞。第51回・第64回H氏賞選考委員。晚翠わかば賞・あおば賞選考委員。第41回から49回壱井繁治賞選考委員。第37回現代詩人賞選考委員。令和2年度宮城県教育文化功労者表彰。

## 著書

詩集「未来ササヤンカの村」「うれうれうぐうす小人」「星々」、新鋭詩人シリーズ「佐々木洋一詩集」、詩塊「01」、詩選集「佐々木洋一詩集」、詩集「アイヤヤツチヤア」「キムラ」「ここ、あそこ」、日本現代詩文庫「佐々木洋一詩集」、現代詩の10人「アンソロジー佐々木洋一」など。

佐々木 洋 一  
ささき よういち

## プロフィール

日本現代詩人会会員、日本詩人クラブ会員、詩人会議運営委員、日本現代詩歌文学館振興会評議員、日本文藝家協会会員、宮城県詩人会会長

住所 宮城県栗原市

## 略歴

宮城県栗原郡栗駒町（現在の栗原市栗駒）生まれ。1981年（昭和56年）、詩集「星々」により第20回晚翠賞を受賞。1998年（平成10年）度宮城県芸術選奨を受賞。1999年（平成11年）、詩集「キムラ」により第27回壱井繁治賞受賞。第1回モデラート賞受賞。第51回・

第64回H氏賞選考委員。晚翠わかば賞・あおば

賞選考委員。第41回から49回壱井繁治賞選考委員。第37回現代詩人賞選考委員。令和2年度宮

城県教育文化功労者表彰。

## 小さな発見を伝えること



三浦 明博

最優秀賞・蜂谷杏琉さん「はじめての海」は、初めての海水浴の様子を書いているが、引き波でかかとの砂がとけていく感触や、波にのまれて見た水中の海草など、全身で感じたことがよく伝わってくる表現に感心した。優秀賞・菅原詩さん「全てはつながつていて」は生と死を見つめつつ、人が星の一部になるという科学的な視点で捉えたところがいい。優秀賞・大場直樹君「か」は短い詩だが、蚊に刺されるのは嫌だから、自分の血を吸えばいいんじゃないという表現の新鮮さがほほえましい。

審査員奨励賞・松尾奈夏さん「過ぎ行く歌」は、噴火する山から自然の怒りを感じ、自ら自然について考えようとする姿勢が、審査員奨励賞・佐藤玖咲さん「晴れ時々曇り所により大笑い」は、一日の自分の感情の揺れを天気予報になぞらえて表現したアイディアが、審査員奨励賞・千葉瑠奈さん「ガラス越しのメッセージ」はガラス窓にへばりついたかえるからメッセージを感じとるセンスが、それぞれ好ましく評価につながった。

他にも、輿茂田真子さん「庭と私」、溝口奏真君「ぼくのいもうと」、佐々木あいらさん「言葉の海」、澄月亮君「明け方の月」、黒澤結人君「ぼくのお父さんはコックさん」、中村真麻さん「私の島」が印象に残った

特別賞・内山芽泉さん「殻」は、コロナ禍に置かれる現状を蟬の抜け殻とダブらせ、早く殻から出たいと切望し、ラストでとりあえず宿題をやつつけるかと笑いで終わらせたのがうまい。特別賞・菅原綾菜さん「15分間の楽しみ」は、登校する自転車での15分間を描くが、どこから香ってきたしよう油のにおいに煮物やしとう油汁まで連想する想像力に驚いた。特別賞・AKAMAMUSIさん「錯覚の景色」は、友達と一緒に自転車で走っていたら、いつもの景色なのに違う町に来たような錯覚を感じた、というもので共感できた。

## プロフィール

小説家、コピーライター、日本推理作家協会会員

住所 宮城県仙台市

### 略歴

宮城県栗原郡築館町（現在の栗原市築館）生まれ。明治大学商学部卒業。仙台市でコピーライターとして2つの広告制作会社を経た後、1989年（平成元年）に独立し、現在までフリーで活動。2000年（平成12年）にシンククエスト・ジャパン学際部門で、小学生向けのインターネット環境教育ソフト「ふしぎのとびら」によりプラチナ賞を団体受賞。同年に第46回江戸川乱歩賞最終候補。2002年（平成14年）に第48回江戸川乱歩賞受賞。2011年（平成23年）度宮城県芸術選奨（文芸部門）受賞。

### 著書

『滅びのモノクローム』『死水』『乱歩賞作家の謎』『サークル市場』『釣師トラップーズ』『コフレモノ』『失われた季節に』『感染公告』『黄金幻魚』『盗作の報酬』『五郎丸の生涯』『ゴッド・スパイダー』『集団探偵』など。

# 子ども達はコロナ禍の中の 自然愛や人間愛を

## どう詩うのか



渡辺通子  
わたなべみちこ

応募総数は628編あり、一次審査で24編が

残った。本審査では11編に絞って選考した。近年、応募作品は数質共に向上しており、中学生の作品のレベルが全般的に高くなっている。

・最優秀賞「はじめての海」（蜂谷杏琉）..初めて海で泳いだ時の感動を感性豊かに表現した。波が引く時の足裏の感覚、海中の様子が、家族愛と共に巧みに表現された。時代が変わろうとも世代を超えてつながる感動である。

・優秀賞「全てはつながっている」（菅原詩）..

コロナ禍は子ども達にとつても生や死を考える契機となつた。人は死んだらどうなるのか——作者の問いは、自然の法則の中に生きる人間存在を浮かびあがらせて読む者的心に深く迫る。

・優秀賞「か」（大場直樹）..「じぶんのちをす

つたらいいんじゃない」という話し言葉の表現がいい。素朴で何気ないひと言だが、作者の腹の底から湧いて出た思いである。

・特別賞「殼」（内山芽泉）もまたコロナ禍で休校や自粛を迫られた中から生まれた作品である。友人や家族への愛がソーシャル・ディスタンス

ンスという「微妙な距離」で閉ざされがちな現実に生きる切なさを切々と読んだ。「15分間の樂しみ」（菅原綾菜）は、登校途中の自然や人間の営みを明るく読んだ。「錯覚の景色」（AKA MAMUSI）は、学校という日常の公的な場を離れ、友人と自転車を漕ぐ様子を読んだもの。

「一人では味わえない開放感」や疲れと心地よさが共存する感覚もまた友情と呼べるものだろう。

・奨励賞「過ぎ行く歌」（松尾奈夏）は雲仙岳の噴火のさまに、自然の怒りの感情を見いだしたもの。自然への畏敬を一語一語吟味して表現した。「晴れ時々曇り所により大笑い」（佐藤玖咲）は一日の生活と自身の心情を天気予報風に明るく表現した。「ガラス越しのメッセージ」（千葉瑠奈）は、ある日、ガラス越しに見つけた一匹の蛙から得た自身の決意を語つたもの。その他、方言を巧みに取り入れた「私の島」（中村真麻）、愛着のあるエレキギターを処分した後の空虚感を読んだ「明け方の月」（澄月亮）も印象に残つた。

渡辺通子  
わたなべみちこ

## プロフィール

東北学院大学教授、日本教育学会会員、俳人「ほの会」代表、俳人協会会員、国際俳句交流協会会員

住所 宮城県仙台市

## 略歴

茨城県日立市生まれ。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程満期退学、公立高等学校教諭、茨城大学（非常勤）を経て2009年（平成21年）4月東北学院大学准教授、現在に至る。他に、宮城学院女子大学（非常勤）、早稲田大学（非常勤）。

## 著書

「未来都市」「鴻志」「言葉の力——東日本大震災に捧ぐ追悼の詩」「新現代俳句最前線」「花美術館松尾芭蕉」56号監修など。

## 寄稿

### 第二十二回「白鳥省吾賞」を

受賞して

井上 尚美

寄稿文のお便りを戴いて、受賞時からもう一年が経つのだと喜びの日々を振り返っています。正賞に続き、この賞に携わった栗原市の皆さんとの温かい心が詰まつた副賞が届いた時の感動は一生忘れる事は無いでしよう。ただコロナ禍で表彰式が中止になつた事は今でも残念に思っています。と言うのも、以前息子が栗原市に在る会社とご縁があつて、栗原市のこと色々伺つていた事が応募動機の一つでもあつたからです。コロナが収束したら是非訪ねてみたいと思っています。

私は長いこと詩を書いて来ましたが、この賞を戴き一番の喜びとした事は三人の審査員の批評の言葉でした。何度も何度も読み返しました。書き続けていく上で、生きる上で尊い助言と

なつて私の中にはあります。

そしてもう一つ嬉しかつた事は、受賞作品を読んだ或る詩人からのお便りでした。その方は長い間難病と闘つていて、このように書かれていました。

（第二十二回白鳥省吾賞  
一般の部 最優秀賞受賞者）  
コロナが収束して栗原市を歩く日の近い事を願いながら担当者の方々に感謝いたします。

ます。

（第二十二回白鳥省吾賞  
一般の部 最優秀賞受賞者）  
近い事を願いながら担当者の方々に感謝いたします。

「この詩に出会えて良かつた。長い間自分の心の置き場所が見つからないでいたが、この詩を読んで新しい気持ちが湧いてきました」と言うものです。私はこのお便りから私の方こそ「このお便りに出会えて良かつた」と言う気持ちになりました。励ましを戴いたのです。一篇の詩が自分を励まし、もう一人の誰かを励ますとしたら、これこそ詩人白鳥省吾の目指した「人間愛」ではないかと、この賞に心から感謝するものです。

受賞時戴いたご本『白鳥省吾の詩とその生涯』の中にある「生活の行進曲として自分自身の詩を持つべきである」の言葉を、私の応援歌として、これからも書き続けていこうと思つています。



## 親族あいさつ

「白鳥省吾賞」は、白鳥省吾記念館が開館した翌年、平成十一年に創設され、今年で第二十三回を迎えることができました。これもひとえに市長をはじめとする市関係者、審査員の先生方、その他多くの方々の熱意とご努力によるものと親族一同感謝しております。「継続は力なり」と申しますが、今回も全国各地から千六百九十五編もの応募作品を頂き、ありがとうございます。

従来、日本の詩は和歌、俳句を体系とする定形型の短詩型による抒情詩や難解な言葉をちりばめた詩がよいものとされてきました。しかし、父白鳥省吾は「詩は特別な文学形態でも無く、一部の人々の物でもなく、人々の日常生活における心の表現を言葉にするものであり、それ自体、社会性を持つものでなければならない」と主張し、民衆詩派の詩人として「誰でも作れる口語による自由詩」の普及に力を注ぎました。この父の考えに影響を与えたのが、米国の国民的詩人ウオルト・ホイットマンでした。ホイットマンは自由、平等、友愛の精神に基づいて、誰もが分かる平易な言葉で人間、平和、世界、自然をありのままに表現し、彼の詩集「草の葉」は現在でもあらゆる階層のアメリカ人の心の支えとして愛読されています。

入選された作品はいずれも質が高く、これからもご自分の考え方、経験、想像力を「日ごろ使っている平易な言葉」で表現し、家族、友人、さらに見知らぬ人々に共感と感動を与えて頂きたいと思います。この賞の益々のご発展をお祈りすると同時に、今回入賞された方々のさらなるご精進をご期待申し上げます。

白鳥省吾氏御令息  
東京都世田谷区在住

白鳥 東五

# 都道府県別応募状況

● 応募総数一、六九五編

● 一般（高校生以上）の部 一、〇六七編

六二八編

● 小・中学生の部

都道府県	一般	小・中学生	合計
北海道	33	69	102
青森	14	0	14
岩手	15	0	15
宮城	256	473	729
栗原市	30	467	497
秋田	9	0	9
山形	6	0	6
福島	5	4	9
小計	383	546	884
茨城	23	0	23
栃木	20	0	20
群馬	20	0	20
埼玉	42	0	42
千葉	39	3	42
東京	123	14	137
神奈川	63	0	63
小計	330	17	347
新潟	8	0	8
富山	4	1	5
石川	5	1	6
福井	7	1	8
山梨	7	0	7
長野	12	0	12
岐阜	16	2	18
静岡	26	1	27
愛知	38	5	43
小計	123	11	134
海外	0	0	0

都道府県	一般	小・中学生	合計
三重	11	0	11
滋賀	8	0	8
京都	36	34	70
大阪	41	1	42
兵庫	36	8	44
奈良	4	0	4
和歌山	2	0	2
小計	138	43	181
鳥取	2	0	2
島根	2	0	2
岡山	15	1	16
広島	23	3	26
山口	7	0	7
小計	49	4	53
徳島	5	1	6
香川	7	2	9
愛媛	5	0	5
高知	5	0	5
小計	22	3	25
福岡	19	1	20
佐賀	8	0	8
長崎	1	0	1
熊本	7	0	7
大分	7	0	7
宮崎	5	0	5
鹿児島	10	0	10
沖縄	10	0	13
小計	67	1	71
合計	1,067	628	1,695

# 白鳥省吾記念館

栗原市公式ウェブサイト <https://www.kuriharacity.jp>



白鳥省吾記念館  
ウェブサイト



栗原市立図書館  
白鳥省吾記念館  
Facebookページ



常設展示室

〒987-2252  
宮城県栗原市築館薬師三丁目 3 番26号  
TEL 0228-23-7967 FAX 0228-21-1404

#### [入館料]

一般 210円 (団体の場合は一人170円)  
小中高校生 110円 (団体の場合は一人 90円)  
※団体は、20名以上の場合。

#### [開館日・開館時間]

毎週火曜日から日曜日まで  
午前 9時から午後 4時30分まで

#### [休館日]

毎週月曜日  
国民の祝日(祝日が月曜日の場合は翌日)  
年末年始(12月29日から翌年1月3日まで)  
特別整理期間

令和4年(2022年)2月発行

白鳥省吾記念館 編集・発行